

物語文における視覚による状況描写の連続的展開に関する認知言語学的分析

澤 泰人*

A Cognitive Analysis of Serial Representation of Visual Perceptions of Situations in Narrative Texts

Yasuto Sawa

0. はじめに

英語の物語文同様、日本語の物語文においても、自己を取り巻く状況に対して自らの視点を投影し、それを認知する作中人物つまりは認知主体と、語り手つまりは表現者の視点の位置関係、およびそれらの視点の当該状況からの距離ともいべきもので、各描写の主観性の程度は明らかになる。そして、それによって3つに分類される形式を、澤(2004)では、それぞれ「客観的間接状況描写」、「主観的直接状況描写」、「中間的情况描写」と呼んだ。同時に、同じ表現形式の場合であっても、主観性の程度が異なることがあり得るということも指摘した。

本稿では、この主観性の程度の変化という現象に着目し、日本語の物語文において視覚による状況描写が連続的に展開するパターンを、そのテキスト単位で分析し、主観性の程度がそのテキストの中でどのような変化を見せるのかを考察し、分類を試みようとするものである。単文単位では、その描写の表現形式の主観性の程度そのものしか論じられなかったわけであるが、本稿ではテキスト単位での連続的分析によって、その変化をも捉える枠組を、認知言語学の観点から提示しようとするものである。扱う作品は、川端康成著『雪国』である。

1. 物語文における状況描写の3表現形式

本稿の主題である、日本語の物語文における状況描

写の連続的展開のパターンを分析する前に、その基本となる3種類の状況描写の表現形式をここで簡潔に再確認しておくことにする。

(1) ...島村が眺め直していると、女は火燵板の上で指を折りはじめた。 <客観的間接状況描写>

(2) 島村はその方を見て、ひょっと首を縮めた。鏡の奥が真っ白に光っているのは雪である。その雪のなかに女の真赤な頬が浮かんでいる。

<主観的直接状況描写；下線部>

(3) しかし目の前の蜻蛉の群は、なにか追いつめられたもののように見える。 <中間的情况描写>

各描写の表現形式は、状況の認知主体である作中人物と、表現者である語り手の投影する視点の位置、およびそれら視点の位置の当該状況からの距離ともいべきもので、認知言語学的観点から分類されたものである。

(1)の客観的間接状況描写は、認知主体である島村を表現者が明示する。認知主体の視点が状況の内側に置かれているのに対し、表現者は状況の外側から客観的に状況を眺め、描写する。したがって、認知主体である島村とその知覚行為がともに明示されるのである。両者の視点の間には明確な距離があり、表現者はあくまで状況の外側から、客観・間接的に描写を行う。

(2)の主観的直接状況描写は、これとは逆に、表現者は当該状況の内側に視点を入り込ませ、認知主体の視点と一致させる。それゆえに、表現者は認知主体と一体化したかのごとくなり、結果、認知主体は表

(2003年12月19日 受理)

* 宇部工業高等専門学校英語教室

現者において意識されず、明示されなくなる。表現者は、あたかも認知主体であるかのごとく、当該状況の内側にその視点を主観的に投影し、状況描写を直接に行うのである。したがって、この描写においては、認知主体ばかりでなく、その知覚行為までもが描写されない。

(3)の中間的情况描写は、客観的間接情况描写と主観的直接情况描写の中間的性質を持つ。すなわち、認知主体は明示されないが、その知覚行為は描写されるもので、(3)では「見える」がそれにあたる。この場合、表現者の視点は状況の内側に位置する認知主体の視点と一致するわけでもなく、逆に状況の完全に外側に置かれて描写を行うわけでもなく、その中間の、あいまいな位置に投影されているのである。

以上からわかるように、視点の位置によって変わる主観性の程度は、客観的間接情况描写 中間的情况描写 主観的直接情况描写の順に高くなる。

本章では、英語と日本語両方の物語文に当てはまる、知覚による状況描写の3表現形式を概観し、それぞれが認知主体と表現者の主観的な視点を反映していること、また、それらの視点の位置関係と当該状況からの距離ともいべきものによって主観性の程度に差が生じ、それが表現形式の差につながるということを確認した。これを基に、次章では、これらの状況描写が物語文のテキスト内部において、どのように展開していくかを、日本語の場合において分析し、今後の日英対照研究のための材料を整えておきたいと考える。

2. 視覚による状況描写の連続的展開

本章では、本稿の課題である、物語文内における視覚による状況描写の連続的展開を、テキスト単位で分析することとする。これまでの分析は、各々の状況描写を単体でとらえ、それが状況描写の3表現形式のいずれに属するかを分類・整理するものであった。しかし、物語文は元来、一連のテキストの流れである。それゆえに、あるテキストの内部において、状況描写の表現形式が連続的に変更され展開してゆく場合が当然存在する。この場合、それはどのように展開してゆくのかを明らかにすることが極めて意義深いことであると言える。なぜならば、これまでの分析からわかるように、表現形式の変更は視点の移動を意味するからである。視点の移動は、すなわち表現の主観性の程度の変化を意味する。日本語と英語の物語文それぞれにおいて、状況描写の表現形式の展開の仕方の異同が明確にされれば、それは両言語の表現形式の視点の移動の差異、言い換えれば主観性の変化の違いが示されるは

ずである。この点において、日英語対照研究を基盤とした、言語類型論に貢献し得るのである。本稿では、日本語に的を絞って、実際の例を分析してゆくこととし、今後の日英語対照研究に結び付けたい。

では、『雪国』を例に、視覚による状況描写の連続的展開のパターンを以下に見ていこう。

2.1. 客観的間接情况描写 主観的直接情况描写

まず、最も代表的なパターンとして、客観的情况描写から主観的情况描写へと連続的に展開してゆく例を以下に挙げる。

(4) ...島村ははっきり知ると、自分が厭になる一方女がよけい美しく見えて来た。杉林の陰で彼を呼んでからの女は、なにかすっと抜けたように涼しい姿だった。

(5) 島村が汽車から降りて真先に目についたのは、この山の白い花だった。急斜面の山腹の頂上近く、一面に咲き乱れて銀色に光っている。

(4)(5)ともに、第一文が作中人物の島村を認知主体とする客観的間接情况描写であり、第二文は島村の知覚した状況を描写する主観的直接情况描写である。よって、それぞれの第二文では、認知主体も、またその知覚行為も表現されない。この場合、表現者の視点が、第一文から第二文にかけて大きく移動していることがわかる。つまり、第一文においては、表現者はあくまで状況の外側に視点を置き、そこから認知主体をも含めた当該状況を客観・間接的に描写しているのだが、第二文に至る段になって、一気にその視点は状況内部に入りこみ、認知主体の視点と同一化して状況認知を行い、描写しているのである。ただし、厳密に言うところ、描写の末尾にル形を用いた(5)では表現者の視点は認知主体の視点と完全一致しているが、夕形を用いた(4)では前者は後者のやや外側にある。¹⁾その点で、(5)の主観的直接情况描写の方が(4)のそれよりもさらに主観性が高いと言える。もっとも、両例ともに第一文からは視点が大きく状況の内側へ、認知主体の側へ移動していることは間違いがない。

2.2. 中間的情况描写 主観的直接情况描写

次に、中間的情况描写から主観的直接情况描写へ展開してゆくパターンを見てみよう。

(6) ふと島村は駒子と逆の方のうしろを振り向いた。
(a) 乗って来た自動車のわたちのあとが雪の上にはっ

きり残っていて、星明りに思いがけなく遠くまで見えた。(b)車が駒子の前に来た。駒子はふっと目をつぶったかと思うと、車に飛びついた。

(7) (a)見上げると高い宿屋の二階三階も、たいていの部屋が障子をあげた明りの廊下に人が出て火事を見ていた。

(b)庭のはずれに並んだ菊の末枯れが宿の燈か星明りかで輪郭を浮かべ、ふと火事が映っていると思わせたが、その菊のうしろにも人が立っていた。

上例各々において、下線部(a)が、(6)では島村を、(7)では島村および駒子を認知主体とした中間的情况描写である。すなわち、これら認知主体の知覚行為は「見える」「見上げる」というように表現されているが、認知主体自身は明示されていない。この時点では、表現者の視点は状況の内側にはあるものの、限りなく外側寄りであり、中心にある認知主体の視点とはある程度の距離が置かれている。そしてそれが、(b)に至るや、主観的直接情況描写へと展開し、表現者の視点は限りなく、あたかも一致するかのごとく、認知主体の視点に接近するのである。そうすると、表現者の視点は、前節2.1.の場合と同じく、相対的に外から内へ移動していることになる。もっとも、この場合には、はじめの描写が中間的情况描写であるから、はじめの描写が客観的間接情況描写であった前節の場合と比べると、元々表現者の視点は内側寄りである。この点では、本節のパターンの方が視点移動がゆるやかであり、移動の距離も相対的に小さいと言える。

さらに言うと、同じパターンであっても、(7)の方が(6)よりも視点の移動は若干小さい。これは、知覚行為の能動性に起因する。(7a)の知覚行為が「見上げる」という能動的表現で表されているのに対して、(6a)の知覚行為は「見える」という、能動性の低い、どちらかという受動的表現で表されている。澤(2004)で明らかにしたように、能動的表現の方が主観性の程度は高く、その意味で、はじめの中間的情况描写において、(7a)の方が(6a)よりも表現者の視点が相対的に内側にあり、認知主体の視点に接近していると言える。

いずれにしても、前節と本節で確認したがごとく、基本的には、物語文における視覚による状況描写が連続的に展開する場合、客観的な描写からより主観的な描写へ移ってゆくことがわかる。換言すれば、表現者の視点が相対的に状況の外側から内側へと移動してゆくわけである。とりわけ、客観的間接情況描写から、中間的情况描写の表現形式の選択の可能性を飛び越え、

ル形を末尾に用いた主観的直接情況描写へと一気に展開する場合、視点の移動は大胆であり、その距離も大きいと言える。英語では、日本語の夕形に相当する過去形から、ル形に相当する現在形(歴史的現在)へと一気に展開する場合は極めて稀であり、日本語ほど表現者の視点が自由自在に、また大胆に移動しない。このことは、板坂(1971:146-147)の以下の指摘にもある通りである。

「(英語の)歴史的現在の場合は...話し手の視点は固定していて動かない。そして、現在形ははじめから終りまで維持されねばならない。これに対し、日本語の場合は、触和型であるため話し手の視点が自由に動かし、時制の統一はむしろ避けられる傾向にある。」

この考えを援用しつつ、以上の考察をまとめると、日本語の物語文においては、相対的に客観的な描写形式から主観的な描写形式へと展開してゆき、それがかなり自由に行われるということが明らかになった。これは、従来から指摘されている、日本語は共感型の言語であるとか、主観的な言語であるという事実に起因するのであろう。つまり、表現者ははじめは状況の外側に自身の視点を置いて、認知主体をも含めた当該状況を客観・間接的に描写しようとするが、いつしか認知主体に共感し、視点を一体化させるように内側へと移動させていった結果、主観・直接的に当該状況を描写するようになるのである。言い換えれば、表現者の視点が「外内」へと移動するわけである。共感型言語の日本語ならではのいえよう。実際、このような状況描写の連続的展開が、日本語の物語文においてはきわめて多いのである。

ところが、視点の移動が逆に「内外」となるパターンも存在する。次節では、その分析を行う。

2.3. 主観的直接情況描写 中間的情况描写

本節では、これまでとは逆に、表現者の視点が相対的に内側から外側へ移動した結果の状況描写の連続的展開のパターンを考察することとする。以下の例を検討してみよう。

(8) 山々の初夏を見て来た自分の眼のせいかと、島村は疑ったほどだった。(a)着つけにどかか芸者風なところがあったが、無論裾はひきずっていないし、やわらかい単衣をむしろきちんと着ている方であった。(b)帯だけは不似合いに高価なものらしく、それが反ってなにかいたましく見えた。

(9) (a)五十過ぎの男と顔の赤い娘とが向い合って、ひっきりなしに話しこんでいるばかりだった。肉の盛

り上がった肩に黒い襟巻を巻いて、娘は全く燃えるようにみごとな血色だった。胸を乗り出して一心に聞き、楽しげに受け答えしていた。(b)長い旅に行く二人のように見えた。

(8a)(9a)はともに、作中人物である島村を認知主体とする主観的直接情況描写である。認知主体も知覚行為も明示されない。一方、(8b)(9b)は、同じく島村を認知主体とする中間的情況描写である。認知主体は明示されないが、知覚行為は「見える」という表現でもって表されている。すなわち、これらの例においては、相対的に主観的な情況描写の表現形式から、客観的な形式へと展開している。表現者の視点が、これまでのパターンとは逆に、内側から外側へと移動しているのである。そうすると、これに対しては、従来、日本語は共感的言語であるという論考では説明がつかなくなる。というより、これは表現の傾向あるいは頻度から見た論考である。日本語では「外内」の視点移動の方が頻度的に多いという事実から得られた帰結であって、勿論「内外」の視点移動も、傾向としては少ないにしろ、存在するわけである。では、どのように考えればよいであろうか。

板坂の指摘にもある通り、日本語は視点の移動が自由自在である。この事実を物語文における情況描写において考えた場合、それは単に情況の「外側から内側へ」という一方通行の移動ではなく、「内側から外側へ」の移動をも含意する。この時、表現者の「外内」への視点移動は、従来の指摘である、表現者の認知主体への共感あるいは移入と考えるのが妥当であろう。では、何故に「内外」の視点移動が存在するのかといえば、表現者が自らを客体的な存在として再認識するからではないかと考えられる。表現者は、本来は語り手として物語を語ってゆくのであり、立場として、物語中の情況より外側に、本来存在していなければならない。主観的直接情況描写のように、視点が認知主体と同一化してしまうような場合には、もはや語り手という存在は意識上消滅し、むしろ当該認知主体と一体化したような状態になる。言うなれば、表現者であるはずの語り手自身が、認知主体である作中人物化してしまうのである。しかし、表現者たる語り手には、読者に物語を伝えるという本来の立場が厳として存在する。そこで、いったん共感的に情況の内側へと入り込み、認知主体とあたかも一体化するかのよう直接的に情況を認知するものの、次には意識的に本来の語り手という客体的な立場に立ち帰る、すなわち、視点を情況の内側から外側へと相対的に移動し戻すと考えられるのである。このように考えると、日本語が共感

的言語であるという原則を崩すことなく、「内外」への視点の移動を明確に説明できるのである。

3. 結語と今後の課題

本稿では、日本語の物語文における知覚による情況描写がテキスト内で連続的に展開する場合に、どのように展開してゆくのかを分析し、またなぜそのような展開になるのかということ考察した。まず第1章で、物語文中の視覚による情況描写の3つの表現形式を、視点の位置と情況からの距離という認知言語学的観点から示した。続く第2章では、これらの情況描写の表現形式が物語文中のあるテキスト内で連続的に展開する場合を、実際の例を基に検証した。その結果、日本語の物語文においては、日本語自体が「共感型言語」である事実を反映し、基本的には客観的間接情況描写または中間的情況描写から主観的直接情況描写へと展開してゆくことがわかった。すなわち、相対的に客観的な表現形式から主観的な表現形式へ流れ、表現者の視点が外側から内側へと移動するのである。また、逆に主観的な表現形式から相対的に客観的な表現形式に展開していく場合には、認知主体の視点に自らの視点を接近させていた表現者が、本来の語り手という客体的な立場に立ち帰るためであるとの結論を得た。

今後の課題としては、まず、英語の物語文における知覚による情況描写の表現形式が、その物語文中のテキストの中で連続的に展開する場合を考察することである。本稿で明らかになった、日本語における展開方法との異同が、これによって明らかになるだろう。そして最終的には、物語文の日英対訳を題材にした対照分析によって、同一の情況に対する認知様式・描写形式の両言語間の違いをも示すことが重要である。それを基盤として、日英語の視点・認知と言語表現化の関係が認知言語学的観点から説明され、言語類型論に貢献することが可能となろう。

註

- 1) この点については、澤(2004)第2章第2節の分析を参照されたい。

引用・参考文献

- [1] 板坂 元. 1971. 『日本人の論理構造』 講談社、東京.

- [2] 川端康成. 1947. 『雪国』 新潮文庫、東京 .
- [3] 久野日章. 1978. 『談話の文法』 大修館書店、東京 .
- [4] 水谷信子. 1985. 『日英比較 話し言葉の文法』 くろしお出版、東京 .
- [5] 中川ゆきこ. 1983. 『自由間接話法』 京都あぼろん社、京都 .
- [6] 西村義樹. 2000. 「対照研究への認知言語学的アプローチ」、坂原茂 (編) 145-166 .
- [7] 坂原茂 (編) . 2000. 『認知言語学の発展』 ひつじ書房、東京 .
- [8] 澤 泰人. 2004. 「日本語の物語文における視覚による状況認知の表現形式に関する考察」、『宇部工業高等専門学校研究報告第 50 号』、宇部工業高等専門学校.
- [9] 山梨正明. 1995. 『認知文法論』 ひつじ書房、東京 .
- [10] Banfield, A. 1982. *Unspeakable Sentences: Narration and Representation in the Language of Fiction*, Routledge & Kegan Paul, Boston.
- [11] Black, J.B., et al. 1979. "Point of View in Narrative Comprehension, Memory, and Production," *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 18, 187-198.
- [12] Bruder, G.A., et al. 1986. "Deictic Centers in Narrative: An Interdisciplinary Cognitive-Science Project," Technical Report at State Univ. of New York at Buffalo.
- [13] Kuno, S. & E.Kaburaki. 1977. "Empathy and Syntax," *Linguistic Inquiry* 8, 627-672.
- [14] Leech, G.N. & M.H.Short. 1981. *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*, Longman, New York.
- [15] Morrow, D.G, et al. 1987. "Accessibility and Situational Models in Narrative Comprehension," *Journal of Memory and Language* 26, 165-187.
- [16] Rapaport, W.J., et al. 1989. "Deictic Centers and the Cognitive Structure of Narrative Comprehension," Technical Report at State Univ. of New York at Buffalo.
- [17] Uspensky, B. 1973. *A Poetics of Composition*, University of California Press, Berkeley.
- [18] Wiebe, J.M. 1990. "Recognizing Subjective Sentences: A Computational Investigation of Narrative Text," Technical Report at State Univ. of New York at Buffalo.